えど友ホームページ
https://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO
えど友

第122号
令和3年
(2021)
9 ― 10

江戸東京博物館友の会会報

目次

オランダ人の江戸参府……1～3
新役員紹介(私のプロフィール) ……4～5
友の会セミナー
「江戸時代の朝廷と幕府ー皇位継承を中心にー」……6
友の会セミナー
「祭り絵師 船橋一泰が描く『江戸東京の祭り絵』」……7
えど友広小路
サークルだより／翻刻だより／友の会めも ……8
特別展「大江戸の華ー武家の儀礼と商家の祭ー」観覧記 …9
江戸博クリップ「お座敷体験！」……9
江戸名所図会を歩く…㊻
[寶珠山與楽寺から光明山圓勝寺]……10
催事案内／会員優待のお知らせ ……11～12

オランダ人の江戸参府

江戸時代における外国人使節の江戸訪問といえば、朝鮮通信使や琉球国使節が有名です。しかし、それらよりはるかに多く行われていたのが、オランダ商館長(カピタン)一行による江戸参府です。参府の旅がどのように行われ、どのような文化交流があったのかを見ていきたいと思います。

江戸参府とは？

オランダ人の江戸参府は、長崎通商免許の御礼を目的としてカピタンが将軍に謁見し、舶来の珍物・貴重品を献上するものでした。対日貿易を行っていたオランダ東インド会社にとって、長崎出島のオランダ商館が将軍および幕府高官と良好な関係を維持することが、極めて重要だったのです。

江戸参府は慶長14年(1609)に開始され、寛永10年(1633)から毎春1回行われるようになりました。寛政2年(1790)から貿易半減に伴って4年に1回となり、嘉永3年(1850)の終了まで計166回行われました。

江戸参府の旅

江戸参府をする商館員はカピタン、書記、医師でした。日本からは、長崎奉行所の検使、江戸番通詞、町使、書記、料理人、小使などが大勢付き添い、総勢59人と定められていましたが、これより増えることもありました。正月に長崎出島を出立し、長崎から小倉までを陸路、下関から瀬戸内海を大坂まで海路、陸路で伏見、京都を経て東海道で江戸へ至りました。江戸での滞在の後、長崎に戻るまで約90日間の旅でした。

往路の京都では、所司代から「東海道人馬幷(ならびに)船川渡し証文」が下付されました。帰路では、方広寺の大仏や、知恩院・祇園社・清水寺・

▲「江戸参府図」(ケンペル『日本誌』)

三十三間堂などの名所見物をしています。また、大坂では大坂住友(泉屋)の銅吹所(精錬所)の見物が慣例でした。日本銅は日蘭貿易における決済品で、オランダ船にとっては航海の安全を確保するための底荷として重要だったからです。

道中の宿泊の多くは宿場の本陣でしたが、要となる５カ所には定宿(阿蘭陀宿)が設けられていました。往路順に小倉の大坂屋、下関の佐甲家・伊藤家、大坂の長崎屋、京都の海老屋、江戸の長崎屋です。これらの阿蘭陀宿は、共通の御用を務める同業者として協力関係を保ち、情報交換に努めていました。

阿蘭陀宿長崎屋

江戸の阿蘭陀宿長崎屋は本石町三丁目、現在のＪＲ新日本橋駅４番出口付近にありました。近くに「石町の時の鐘」があったため、「石町の鐘は紅毛まで聞こえ」と川柳に詠まれています。家業は薬種屋で、代々の当主は長崎屋源右衛門を名乗りました。

江戸参府一行の滞在中は、門にオランダ東インド会社(ＮＶＯＣ)紋章入りの赤白青の幕(オランダ国旗)が張られ、町奉行所から普請役２人と組同心２人が出向いて、取り締まりや警備に当たりました。朝の六ツ時(午前６時ごろ)開門、晩の五ツ時(午後８時ごろ)閉門で、オランダ人の外出は禁じられていました。長崎屋の周りは庶民の人だかりが幾重にも取り囲み、ちらっと窓に顔や姿が見えると歓声が上がりました(「長崎屋今に出るよと取り囲み」)。北斎の『画本東都遊』には見物人の様子が描かれています。

一方では幕府の許可を得た様々な訪問客が押しかけ、オランダ人や通詞は多忙な日々でした。訪れたのは蘭癖の諸大名、官医、天文方、陪臣の医師、蘭学者などです。ざっと名前を上げてみても、新井白石・青木昆陽・前野良沢・杉田玄白・平賀源内・大槻玄沢・中川淳庵・桂川甫周・島津重豪・高橋景保・鷹見泉石・渡辺崋山などきりがありません。これらの人々との対談・質問・学習・品物交換などが行われ、まるで文化サロンのような雰囲気だったようです。

オランダ人たちは外で買物ができないため、比較的近い範囲から決められた「定式出入り商人」が土産物や日用品を持ち込みました。この中には駿河町の越後屋も含まれています。また、彼らは将軍家への「献上物」と幕府高官への「進物」を万一に備えて余分に運んできたため、必ず残品が出ました。これを長崎屋が買い取って越後屋に高値で売り、さらに越後屋が小売りしていました。

▲葛飾北斎『画本東都遊』長崎屋（国立国会図書館蔵）

江戸城での行事

拝礼登城の日には江戸在府の長崎奉行が長崎屋に赴き、オランダ人・通詞・長崎屋源右衛門を引き連れて江戸城へ向かいました。将軍への拝礼はカピタン１人が通詞の介添えを得て大広間で行い、書記・医師・源右衛門は次の間に控えます。宗門奉行が合図すると長崎奉行がカピタンを大広間に上げ、共に平伏します。奏者衆より「オーランダのカピターン」と大声で披露されると、直ちに奉行がカピタンの服の裾を引いて合図し、退出して終了。実にあっけないものでした。

しかし、この後別間で「蘭人御覧」と称して、お忍びの将軍をはじめ、幕府の高官、御台所、大奥の女中などがオランダ人見物を行いました。帽子や衣服、帯剣などの持ち物が回覧されたり、歌謡や舞踏を注文されたり、種々の質問がなされたりしました。随行した医師ケンペルの記録によれば、「猿芝居の第二幕」は２時間にわたったとのことです。

江戸城を退出した一行は老中以下幕府高官の役宅を順次回って、無事拝礼を済ませることができた御礼の挨拶をしました。この「廻勤」は３日間もかかり、移動の町筋は見物の群衆でごった返していました。

やがて帰路出立の許可があると、前日に「暇乞い」の挨拶に再び登城することになります。大広間三之間に老中が列座する前で、宗門奉行がオランダ人の遵守すべき条項の書かれた「御条目」をカピタンに読み聞かせ、いったん退去後に戻って将軍と世嗣からの時服の拝領が仰せつけられるというものでした。御条目には南蛮人(ポルトガル人)との通行禁止、オランダとの対日貿易の継続、琉球船の保護などが書かれていました。

様々な贈り物

カピタンの贈り物で多かったのは織物類の反物や葡萄酒などの嗜好品

ですが、初期には様々な趣向を凝らした品もありました。寛永13年の３代将軍家光への献上品は、銅のシャンデリア・毛氈・天鵞絨・羅紗・駱駝織・ピストルなどでした。家光が日光東照宮の社前に飾ったシャンデリア型釣灯籠(オランダ灯籠)は、現在でも見ることができます。

明暦３年(1657)には４代将軍家綱に地球儀と天球儀が献上されましたが、拝礼が明暦の大火の直後だったため、期待したほどの評判は得られませんでした。また万治２年(1659)には老中稲葉正則に望遠鏡とレンベルトゥス・ドドネウスの『植物誌』を贈りましたが、気に入られず返却されています。このように、期待を込めて持参された贈り物も、功を奏した場合も見向きもされない場合もありました。

▲「和蘭人拝礼図」(東京国立博物館蔵)

出島の三学者の参府随行

「出島の三学者」と呼ばれるのはケンペル(ドイツ人)・ツュンベリー(スウェーデン人)・シーボルト(ドイツ人)の３人で、いずれもオランダ商館付医師として来日して江戸参府に随行、多くの日本人と接触して資料収集に努めています。日本滞在はケンペルが元禄３～５年(1690～92)、ツュンベリーが安永４～５年(1775～76)、シーボルトが文政６～12年(1823～29)と安政６～文久２年(1859～62)でした。

ケンペルは江戸参府に２回随行し、道中では臨機に興味を示して資料を集め、観察眼を働かせて客観的な記述をしています。この助けとなったのが、オランダ語のできる青年今村源右衛門で、道中記や絵図の収集、翻訳などに大いに役立ったようです。参府の様子は『江戸参府日記』や『日本誌』に詳しく書かれています。

ツュンベリーは博物学者リンネの弟子でした。そのため、随行の機会に植物収集と日本および日本人理解のための資料収集を望んでいました。道中では機会あるごとに植物採集に努め、多くの標本を母国に持ち帰りました。江戸の長崎屋では多くの訪問客と対談しましたが、最も頻繁に訪れたのが将軍の侍医桂川甫周と小浜藩主の侍医中川淳庵でした。三者間で学問的親交が深まり、学術的品々の贈答・交換が行われました。

シーボルトは、日蘭貿易検討のため、日本を総合的・科学的に調査・研究する使命を帯びており、意欲的な活動を行いました。そのため彼の随行した文政９年の江戸参府は通常と異なっていました。まず、門人たちに加え、薬剤師ビュルガー、画家の川原慶賀、好意的な通詞たちなどを同行し、協力者を増やしました。名目上の総人数は60人ですが、実際は107人もいました。また主要宿泊地で滞在日数を延長すべく働きかけをしたため、通常90日間の江戸参府が143日間にもなりました。これらの成果としては、道中における観測・観察、動植物・工芸品・書籍・書画などの収集、面談による情報・知識の収集、交換による絵図面・地図などの入手が挙げられます。一方、禁制品の日本地図(伊能図)持ち出しが発覚し、「シーボルト事件」を引き起こすことにもなりました。

▲日光東照宮のオランダ灯籠

【参考資料】片桐一男『江戸のオランダ人　カピタンの江戸参府』中公新書、同『それでも江戸は鎖国だったのか　オランダ宿　日本橋長崎屋』吉川弘文館

【取材】文：広報部会・菊池真一

新役員紹介（私のプロフィール）

会　長　待場（まちば）　浩（ひろし）（事業部会）

2014年友の会に入会。翌年事業部会に入りセミナー・古文書講座や見学会で仲間ができ、江戸東京を学び楽しむ。2019年事業部会長に指名されるもコロナ禍対応と博物館長期休館対応が大きな試練。4年間活動なしでは友の会消滅の危惧、休会中も会員が友の会ライフを楽しんでいただけるよう催事開催などを模索の日々。この度青天の霹靂で会長指名、休会中も会員相互のつながりを保ち休館明けの博物館で皆様と再会ができるよう、微力ながら誠意と気概で取り組んでいく所存です。よろしくご支援ご協力をお願いいたします。

副会長　川上（かわかみ）　由美子（ゆみこ）（事業部会長）

通算3期目の役員となります。前回は大ホール改修に伴う休館がありました。今回はそれを上回る4年間の長期休館が待ち構えています。「ついている」といえるのでしょうか。来年の4月から先は未体験ゾーン。経験に甘えることなく経験を活かして、立ち向かっていこうと思っています。でもまずそれまでの半年あまり、いつも通り会員の皆様と共に「江戸東京」を楽しみ、「江戸東京」への思いを深めたいと思います。休館までも休館中も、よろしくお願いいたします。

副会長　菊池（きくち）　真一（しんいち）（広報部会長）

広報部会に入って今年で9年になります。記事の取材で様々な場所を歩きましたが、印象に強く残っているのが地形にまつわるものでした。丘・谷・坂・階段・古街道・川跡・水路跡などですが、これらは人と地形の関わりの歴史でもあります。実際に歩いて初めて見えてくることも多く、これこそが町歩きの醍醐味だと思っています。今回は江戸博長期休館前という難しい時期での再任となりますが、スムーズに再開後の活動につなげるよう努力していきます。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

副会長　上野（うえの）　庸子（ようこ）（総務部会長）

墨田区に越してきて、近くに江戸東京博物館があり、特に浮世絵が好きだったので、特別展など楽しみにしておりました。また江戸時代の庶民の生活に興味を持ち江戸博カルチャーに学びながら、友の会を知り入会しました。友の会で特に楽しみにしていたのが、亡くなられた竹内前館長の総会後の講演でした。入会して会報、江戸博のチラシなど送るのをお手伝いできればと思っている時、総務部会の部会員募集を知り総務部会員となり活動を始めました。今期役員としてお役に立てればと思っています。

事務局長　前田（まえだ）　太門（たもん）（広報部会）

友の会のホームページを担当して10年になりました。「見学会」、「江戸名所図会を歩く」の取材担当者からの写真、文章をもとに写真と地図が主体のページも作っています。この作業を続けていく中で、東京のいろいろな場所を知ることができました。行ったことがある場所は、ごくわずかしかありません。休館中に、『えど友』を読み直して街歩きをしようと思っています。江戸博の休館まで、あと7カ月。それまで、常設展、特別展、イベントを楽しみたいと思います。

会　計　中村（なかむら）　明義（あきよし）（事業部会）

「クレオパトラの鼻がもう少し低かったら、歴史が変わっていた」(パスカル)「歴史は繰り返す」(ツキジデス)など歴史にまつわる名言が多数あるが、この様な名言を思い浮かべながら、友の会事業部会での見学会案内役を務めていると、常日頃、何気なく歩いている道さえも新鮮な風景に見えてくる。今年、傘寿になったが「老而好学、如炳燭之明」の言葉の様に「学びに年齢制限は無く、学びに遅いという事はない」との言葉を信じ、友の会のメンバーと共に歴史を楽しむ活動をしていきたいと思います。

会　計　福田（ふくだ）　徹（とおる）（広報部会）

私と江戸博との関わりは、会社を定年退職した2013年の年初に、えどはくカルチャーで小澤弘先生の「街並みと水辺の風景」という講座に参加してからです。ウイーク・デイの日中に講義を聴くという贅沢さと新鮮な気持ちを今でも覚えています。翌年には古文書講座受講のために友の会に入会しました。時間が自由に使えるようになった2018年には、部会員募集のチラシを見て広報部会に入会しました。現在、会報『えど友』発行に携わっています。まだ若輩者ですがよろしくお願いいたします。

2021年度の第21回定期総会は書面議決となりました。選出された役員13人の役割分担と、プロフィールをご紹介いたします。イラストは新役員の総務部会、藤井文乃さんです。江戸博の長期休館期間中の任にあたる新役員へのご支援、ご協力をお願いいたします。

大塚（おおつか）　仁（ひとし）（事業部会員）

定年間近になってあちこちの古寺社巡りが趣味となり、東京も「江戸三十三観音霊場」を訪ねさまよい歩きました。広い東京、行ったこともなかった町から町へ、その楽しさにすっかりはまってしまい、2013年友の会に入会、2018年事業部会に入会しました。「江戸好き」の集う友の会、「催事」のお手伝いや企画を楽しくやらせていただいております。来年から江戸東京博物館はしばらく休館となりますが、会員の一人として、引き続き楽しい友の会となるよう、お役に立てればと思っております。よろしくお願いします。

日比（ひび）　雅明（まさあき）（事業部会員）

生まれは岐阜県西濃地区です。この地域は戦国時代にさまざまな合戦の場となり、関ケ原が最も有名です。高校卒業後は故郷を離れ、京都、東京、千葉、そして東京と、東京が長くほぼ４０年です。友の会には７年前、事業部会へは４年前に入会しました。役員は２期目になります。昔から歴史への興味が強くあった訳ではなく、江戸東京博物館に何度か通ううち興味が沸き、総会後の交流会で事業部会へ誘われました。目下休館中の対応としてネットの活用を検討しています。よろしくお願いいたします。

藤井（ふじい）　文乃（ふみの）（総務部会員）

総務部会所属です。久しぶりの役員です。博物館の休館まであと半年ほどしかありませんが、休館中も楽しい江戸東京ライフを過ごせるように皆さんと考えていきたいです。総務部会は会報誌『えど友』などの発送作業が主ですが、休館直前には臨時総会も予定されています。友の会は参加すればするほどお得な会です。残念ながら感染症で催事が中止になったり館の展示を観に出掛けられないこともありましたが、休館するまでの間、休館中、そして開館後と、江戸博そして友の会を楽しんでいきたいと思います。

加藤（かとう）　孝（たかし）（館蔵古文書翻刻プロジェクト）

10年前連れ合いに先立たれたのを機に深川へ移り住み、６年前に古文書の勉強を始めてから友の会古文書講座の存在を知り、初級、中級と進み、その合間に催事などにも参加してきました。面白いし、又自分で調べてはとても及ばない事が聞けます。３年前に翻刻プロジェクトの欠員募集があり、無謀にも応募して採用され、良きメンバーに支えられて楽しくやってきました。思いがけず２年前にB班の世話人となり、今年から役員となりました。長期休会中も含め、少しでもお手伝いできればと思います。

監　事　杉谷（すぎたに）　正則（まさのり）

新宿の広大な前田屋敷跡地の片隅で生まれ20才まで暮らしていました。その後は30代前半に一時千駄木の陋屋（ろうおく）に住んだだけであとは都外の暮らしが続いています。江戸博では３年間仕事をさせていただきました。また、両国にはその前の職場を含めると６年間通いましたので、今でも立ち寄る時は何となくほっとします。江戸博は来年から長期修繕工事。しばし縁遠くなるのは寂しいですが、再開時に壮麗な時計塔にお目に掛かれる事を期待して生き延びたいと考えております。

監　事　林（はやし）　正信（まさのぶ）（事業部会）

「第二の人生」として、友の会に入会いたしましたのが、2008年。会員の一人として、友の会の催事に参加し、その後「事業部会」に入会し、事業活動に参加してまいりました。友の会役員として、「事業部会長」、「友の会会長」などの役職を務め、本年の総会で「監事」を拝命し、今後の友の会活動のお手伝いをさせていただきます。2022年より「江戸博」は大規模改修工事に入り、長期間の休館となります。「友の会会員」の皆様のご支援とご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

第204回　江戸東京博物館友の会セミナー（令和3年6月27日）

江戸時代の朝廷と幕府
―皇位継承を中心に―

講師　長坂　良宏さん（日本近世史研究者）

はじめに

2019年は、天皇陛下の御退位(御譲位)と皇太子殿下の御即位が行われました。この譲位は、文化14年(1817)、当時の光格天皇が譲位して以来の、およそ200年ぶりのことでした。この退位(譲位)により、にわかに光格天皇、ひいては、江戸時代の天皇に注目が集まりました。江戸時代の天皇や朝廷とはどのような存在だったか、幕府との関係などを紹介します。

江戸幕府と天皇・朝廷

京都を主戦場とした応仁・文明の乱など相次ぐ戦乱で、朝廷は衰微の一途をたどります。諸国からの収入も途絶え、天皇・朝廷は武家(守護大名・戦国大名、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康)からの援助を期待し、その援助がなくては成り立たない状況となっていきます。

幕藩体制下における天皇・朝廷の役割は大きく四つありました。①将軍・東照大権現への権威の格付け、②国家安全・将軍の病気平癒などの祈祷宗教的機能、③古代以来の機能である官位叙任や元号宣下(改元)、④門跡による諸宗派の編成・祈祷です。いずれも幕府が主導権・実質的な決定権を持っており、天皇・朝廷に残されたのは形式的な「権限」のみでした。しかし、これらの権限は天皇以外誰も取って代わることのできない、不可欠で固有の権限・役割であったので、幕府は天皇・朝廷を維持し保護し続けました。

幕府は、朝廷を統制する要として、五摂家(摂政・関白に唯一任じられる家格。近衛・九条・一条・二条・鷹司の五家)をその中心に位置づけました。またその下に、朝廷と幕府間の連絡役である武家伝奏を、さらに寛文3年(1663)、霊元天皇の養育係を発端とする議奏を創設します。この三者が中心となって朝廷運営を担い、朝廷統制機構として、幕府に位置づけられました。

江戸時代の皇位継承

前天皇の譲位による即位を受禅(じゅぜん)と呼び、崩御(死去)による即位を践祚(せんそ)といいました。皇位継承年齢でみると、10歳未満が5人、10〜15歳が3人、そして16歳以上が8人でした。15歳未満には摂政が置かれ、天皇が15歳になると関白となりました。女帝の場合は、摂政が置かれ続けました。譲位年齢は30歳代が7人、40歳代が2人です。30歳代半ばが譲位の適齢期だったようです。

18世紀に入ると天皇、上皇の早世が続き、皇位継承はまさに綱渡りでした。桜町上皇が寛延3年(1750)に31歳で亡くなったとき、桃園(ももぞの)天皇はまだ10歳でした。その桃園天皇が22歳の若さで崩御し、後継の皇子(後桃園天皇)は当時5歳で病弱だったため、桃園天皇の姉である後桜町(ごさくらまち)天皇が宝暦13年(1763)、皇位に就きました。

皇位継承の不安定さと新宮家の創立

江戸時代の皇位継承は決して順調ではなく、明正(めいしょう)・後桜町の女性天皇2人、閑院宮家から養子になった光格天皇など、やっとのことで皇位をつないでいました。閑院宮家は、東山天皇の第6皇子である直仁(なおひと)親王を祖としています。

閑院宮家については、新井白石の建言などにより、宝永7年(1710)8月10日、新宮家として立家。家号と家領は、享保3年(1718)に下賜されます。家領1000石は、幕府が支給しました。「光台一覧」という資料には、中御門天皇が幼少の頃に病弱であったことが幕府に伝わり、そのため幕府が万が一の事を想定し、本来は門跡寺院へ入寺の予定だった「秀宮」を親王家として取り立てたとの記載があります。

桜町上皇には、自身が危篤に陥った際、皇位についての「遺詔(ゆいしょう)」(遺言)がありました。その内容は、「主上」(桃園天皇)にもし皇子が誕生しない場合、次の皇位は「弾正尹(だんじょういん)」(当時この官職に任じられていた閑院宮直仁親王を指す)に皇位を継がせよとのことでした。また、桃園天皇に皇子が2人誕生した場合、一宮は皇統を継ぎ、二宮は「為皇統之固」として、新宮家を創立させるよう、幕府へ働きかける意向があったことも資料から分かります。天皇自身も、皇位継承していくことの難しさ、その危機意識を強くもっていたことがうかがえます。

おわりに

公家の野宮定晴は、自身の日記に「近代皇統微々如縷」、近年の皇統は、か細い糸で継承されている、と記しています。江戸時代前期には、長命の天皇や上皇、子女も多かったのですが、中後期になると、天皇の早世が続き、子女も少なくなり、野宮の日記にあるような危機的状況が生じたと考えられます。一方、皇位継承の危機に対し、幕府や天皇・朝廷も決して手をこまねいていたわけではないことも、今回紹介した資料などから、うかがうことができたのではないかと思います。

レポーターからひとこと

中世以前の皇統に関しては、いろいろな場で知る機会がありましたが、近世について知ることがなかったので難しかったです。　参加者84人。

【記録】文・写真：広報部会・元沢　宏

第205回 江戸東京博物館友の会セミナー（令和3年7月4日）

祭り絵師 船橋一泰が描く『江戸東京の祭り絵』

講師 船橋 一泰さん（祭り絵師）

はじめに

漠然（ぼくぜん）とではありますが、デザイナーやイラストレーターを意識し始めたのは、中学校の美術の時間でした。しかし、憧れてはいても将来の職業とすることについてはなかなか自信が持てず、3年生になってようやく「デザイン界へ進もう」との方向性を決めました。

デザイナーからイラストレーターへ

美術学校でグラフィックデザインを学んだ私は、グラフィックデザイナーとして就職しました。ポスターや広告などのデザインを考え、画家やイラストレーターなどへ提案したり指示する仕事です。思った通りに仕上がった作品を見せられたときは嬉しく、実に楽しく取り組んでいました。しかし10年も経ちますと、物作りという観点で仕事の内容に疑問を持つようになりました。一方で、イラストを使った素晴らしいデザインを考えても、一般の方から見れば、目に飛び込んでくる印象は画家でありイラストレーターの作品です。評価されるのもイラストレーターばかりで、デザイナーが誉められることはありません。そのことに対する不満が、徐々にですが確実にたまっていきました。

その後も仕事は続けていたのですが、以前ほどのわくわく感も情熱もありませんでした。日々、デザイナーからイラストレーターへの転身を考えるようになっていたからです。しかし、おいそれと転身できるほど甘くはありません。

交流から独学・テーマ探しへ

幸いデザイナーをしていたため、画家やイラストレーターには事欠きません。その気になれば、周りは先生だらけです。打ち合わせの合間に描き方のコツや特長を教えてもらい、毎日練習しました。

作品ができれば、人に見てもらいたくなるのは人情です。機会をつかまえてはそうしていました。当たり前ですが、当初は歯牙にもかけてもらえませんでした。それでもめげることなく描き続けました。イラストレーターの齋藤壽さんから、影の描き方などを教わったのは大変な収穫です。おかげで、徐々にですが技量が上がっていることを、自分でも感じるようになりました。

技量が上がると、現実との葛藤が始まります。テーマ探しです。人と同じことをしてもつまりません。自分にとってのテーマは何だろう。何をしているときが一番楽しいのだろうか。そう考えた結果、子供の頃から神輿を担ぐことが大好きであった。そこで「祭りと下町情緒」に特化した絵師になろうと思いました。

題材確定と取材

絵師としてのテーマが決まると、具体的な題材の絞り込みや表現方法を考えねばなりません。熱気、音、声。これらが伝わるような絵を描きたいと思いました。そのためには、資料集めと取材が必須となります。現地へ出向き、祭りの主役である土地の人たちと会い、情報を集めます。それらを把握した上で、構図や構想を練り、祭り当日は思いの丈を写真に収めます。その後、絵に落としていくのですが、再び葛藤が始まります。

私の好きな祭りと技法

私の祭り絵師としての方針は、時代を感じられる背景は描かないことです。それというのも、祭りは時代を超越して行われるものだからです。世の中がどんなに進化しても、デジタル時代になろうとも、人と人が集う祭りはアナログの良さを伝えてくれます。

日本三大祭りといえば、京都の祇園祭、大阪の天神祭、そして東京の神田祭です。神田祭は別名を「天下祭り」と呼ばれ、山王祭と共に、江戸城内に入ることが許されていたからです。また「神輿深川山車（だし）神田、だだっ広いが山王様」といわれたように、この三つの祭りを江戸三大祭りと呼んでいました。

繰返しになりますが、祭りは土地の人たちのものです。絵にする場合も、その人たちから共感されなければいけません。ギャラリーではなく、祭りに参加する人たちの目線で、躍動感を伝えたいのです。

レポーターからひとこと

ギャラリーではなく、参加者になったつもりで祭り絵を見る。とても新鮮な目線でした。参加者83人。

【取材】文：広報部会・光田憲雄
写真：同・秋元康良

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

６月、７月休会。

◆藩史研究会

６月11日(金)辻井清吾さんの発表。岸和田藩(和泉国・大阪府)は、小出氏、松平氏の統治を経て、寛永17年(1640)、岡部宣勝(のぶかつ)が徳川家光の信任を得て、紀州徳川家の抑えとして摂津国高槻藩より６万石で入封した。３代長泰(ながやす)は元禄16年(1703)、京都伏見稲荷を城内に勧請し、五穀豊穣を祈念した稲荷祭が現在の「岸和田だんじり祭」の起源とされる。最後の藩主13代長職(ながとも)は、慶應義塾に入学し、留学。岸和田教会を創立、英国大使館などに勤める。参加者９人。

６月25日(金)國定美津子さん担当の見学・学習会。守谷藩(下総国・千葉県)は、徳川家康の家臣、土岐(菅沼)定政が天正18年(1590)に甲斐国巨摩郡切石１万石から転封され成立した。孫の土岐頼行は、寛永５年(1628)に出羽上山に移封され、再び守谷は幕府直轄となった。同19年に、堀田正盛が信州松本から13万石で佐倉城に入った時、守谷領は佐倉藩領になった。正盛の三男正俊は、１万３千石で守谷領を継いだが、寛文７年(1667)上野国安中に移封したため、幕府領に編入。同９年、酒井忠挙(ただたか)が入封したが、天和元年(1681)に上野国厩橋藩主となったため、関宿藩久世家の領地となった。守谷は宿場として、東西南北の街道の重要地点となった。見学会は、関東鉄道常総線南守谷駅から八坂神社、長龍寺など神社仏閣、守谷城址(本丸跡・二の丸跡など)を見学した。参加者６人。

７月９日(金)國定美津子さんの発表。生坂(いくさか)藩(備中国・岡山県)は寛文12年、岡山藩主池田光政が、開発直後の岡山新田を次男政言(まさこと)に鴨方2.5万石、三男輝録(てるとし)に生坂1.5万石を分与。岡山新田藩とした。実質的には、本家岡山藩所有の新田であり、その石高は備前岡山藩の内高に含まれていた。明治元年(1868)、立藩を許されたため、その後岡山新田藩改め生坂藩と称した。江戸・明治を通して８代続いた。参加者10人。

◆「米屋田中家明治日記」を読む古文書の会

６月、７月休会。

◆『江戸名所図会』輪読会

６月、７月休会。

◆日本の大道芸伝承会

６月16日(水)練習会場である烏山区民センターが時短ではあるが再開したため、練習を再開した。９月に開催の深川江戸資料館主催イベント「江戸の物売りと大道芸」に出演することが決まっているため、それに向けての練習を始めた。参加者３人。７月14日(水)イベント出演という目標があると頑張れる。それに向けての練習をした。参加者３人。

◆江戸を語る会

６月休会。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

６月、７月休会。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。

館蔵古文書翻刻だより

◆Ｂ班『御下向御用向　大宝恵』

文久元年(1861)11月の日付がある「おぼえ」に、米屋の使用人の給料と賞与に関するメモがある。請負業務の現場責任者と思われる宗兵衛・伊平・源七の３人について、翌文久２年の基準が、宗兵衛は月給５両・盆暮各10両、年間計80両、伊平は月給４両・盆暮各６両、年間計60両、源七は月給３両１分・盆暮各３両２分、年間計46両となっている。これに対し、前年文久元年暮の分の支払いは、宗兵衛25両、伊平と源七は吉田公番所１月～８月、沼津公番所１月～12月、長岡公番所３月～12月と、事業所の掛け持ちをしており、伊平30両、源七25両を見込んでいる。その支給条件として、怠けず精勤することとある。賞与は個々の支給基準をベースに、期間実績により決めるということが、江戸時代において既に実施されていたと思われる。

友の会めも(開催日と人数)

令和３年６月～７月

◆役員会６月８日(火)11人。７月13日(火)12人。◆事業部会６月３日(木)12人。７月６日(火)17人。◆広報部会６月15日(火)８人。７月20日(火)９人。◆総務部会６月22日(火)11人。７月27日(火)中止。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト６月在宅作業でメール連絡。Ａ班６人。Ｂ班６人。７月在宅作業でメール連絡。Ａ班６人。Ｂ班６人。

《　休館まであと６カ月　》

■「アンケート」と「メールアドレスの登録」にご協力を

・「アンケート」は、この『えど友』と一緒にお届けしています。
・「メールアドレスの登録」については、友の会のホームページと折り込みチラシの登録方法をご覧ください。

特別展「大江戸の華―武家の儀礼と商家の祭―」観覧記

今回の特別展は、江戸の武家や商家の儀礼・祭りなどの年中行事に着目し、都市江戸の明るい一面に迫るものです。プロローグに展示されている「色々威胴丸具足」は、慶長18年(1613)に徳川秀忠がイギリス国王ジェームズ1世に贈ったもので、友好的な外交という舞台に登場した「大江戸の華」を伝える一品です。

第1章　式正 ―武器と儀礼―

戦乱から泰平の世になると、家の序列や秩序を維持するための儀礼が武家に求められるようになり、具足(甲冑)や刀剣も儀礼の場で用いられるようになります。まず、ずらりと並んだ5領の具足に目を奪われます。中央にある「白紺糸威丸胴具足」は紀伊徳川家当主の所用と伝えられ、倶利伽羅(不動明王の化身)の前立、白檀塗り、三ツ葉葵紋の金具を施した贅沢なものです。また、刀剣コーナーにある「太刀 銘 景光」は土井利勝が秀忠から拝領したもので、儀式の際に身につける糸巻太刀です。この他、徳川家光が下賜した将軍の乗り物、家光の日光社参の様子を描いた「日光東照社参詣図屏風」、大名に対する将軍からのお礼状である「歴代将軍黒印状」などが展示されています。

第2章　年中行事 ―お稲荷さまと雛祭り―

江戸の大店の一つである鹿嶋屋東店で行われた様々な年中行事の様子から、町人の暮らしにおける「ハレ」の場面に迫ります。中央には屋敷神の富永稲荷にあった社殿・賽銭箱・鰐口・神使狐像・灯籠が配置され、境内の様子が表されています。右手にある「四神旗」は中国から伝わった四神信仰によるもので、四神像(朱雀・玄武・白虎・青龍)・竿・稲荷の神紋入り旗・井桁からなっています。

また、左手にある雌雄一対の獅子頭は安政5年(1858)に稲荷へ奉納されたもので、各所に金があしらわれています。

一方、ケースの中に所狭しと並んだ古今雛と雛道具は文政10年(1827)制作で、当主清左衛門が娘の「さほ」と「いほ」のためにあつらえたものです。豪華な造りで、江戸商家のもので良好な保存状態で残されているのは、極めて珍しいそうです。

第3章　憧憬 ―彩りの道具と装い―

武家社会における女性の大きな役割の一つは、家を守り、次世代へ引き継ぐことでした。女性に関わる多様な儀式や役割から、江戸の繁栄を影から支えた彼女たちの姿を描き出していきます。最初の「白麻地御殿模様茶屋染帷子」は上層の武家女性の夏の正装用着物で、茶屋染とは四季の草花と楼閣を組み合わせた模様を藍染めしたものです。中央にある「梨子地葵紋散松菱梅花唐草文様蒔絵女乗物」は徳川綱吉の養女八重姫の輿入れに際して制作されたものと考えられます。一般的な地塗りが黒塗りなのに対して徳川家だけが梨子地を使っており、別格の存在であることを表しています。周囲には香箱・雛道具・鏡・化粧道具などの婚礼調度も展示され、一段と華やかです。

エピローグには紀伊徳川家伝来の金銀の具足が並べられ、展示を締めくくっています。

【取材】文・写真：広報部会・菊池真一

江戸博クリップ

お座敷体験！

都市歴史研究室　司書　濱岡　智子（はまおか　ともこ）

私は京都が好きで、何度も旅行に行っています。京都の魅力はたくさんありますが、そのうちの一つに舞妓さんがあります。その舞妓さんと直接ふれあうことができる「お座敷」を私は一度体験したことがあります。

10年以上前のことですが、舞妓さん関係のSNSのコミュニティで知り合った女性4人と、祇園のとあるお店の2階に5人の舞妓さんを呼んで、舞を見たりお話しをしたりしました。俗に「お座敷遊び」といわれる「金毘羅船々」や「とらとら」などを一切しなかったのは少し残念でしたが、舞妓さんたちと年代が近いこともあって女子トークに花が咲き、彼女たちも普通の女の子なのだと、とても身近に感じました。

来てくれた舞妓さんは、まだ下唇にしか紅がぬれないデビュー1年目の舞妓さんから、襟替え(舞妓さんから芸妓さんになること)の時期が近いお姉さんまで幅広く、また性格もバラバラでした。なかでも人気のある舞妓さんは、はっきりとモノをいう方で、気の強い方だと感じました。でもそんな方が、次のお座敷の時間なのに私たちといたほうが楽しいからと、時間が過ぎてもしばらくいてくださったり、花名刺という舞妓さんがもつ名刺を柄違いで何枚も下さったりしたのはとても嬉しかったです。

大変緊張しましたが楽しく過ごすことができ、あっという間の時間でした。機会があれば今度はゆったりした気持ちで、心ゆくまで楽しみたいです。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…56

[寶珠山與楽寺から光明山圓勝寺]

円勝寺　山門

田端の与楽寺は54回の最終地である道灌山の西端の辺りにあります。眺望のよかった道灌山遺跡のひぐらし坂を思い出し、また西日暮里駅からひぐらし坂を経由して歩くことにしました。

寶珠山與楽寺（宝珠山与楽寺）

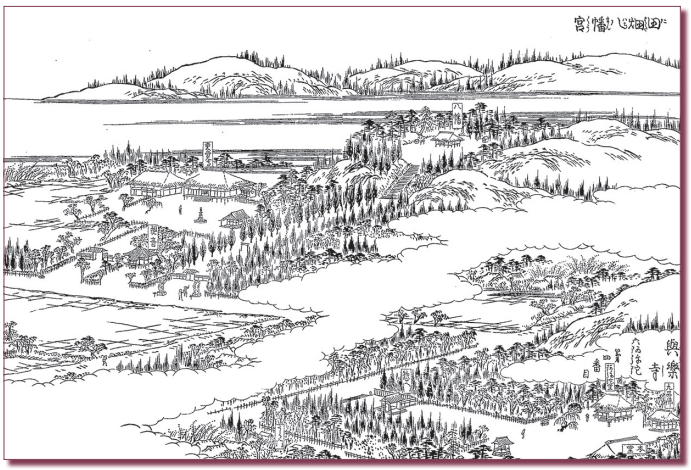
ひぐらし坂のてっぺんから下り、田端台公園を左折、坂を下って突き当たった右手が与楽寺です。創建年代は不詳で、ご本尊は地蔵菩薩の真言宗豊山派のお寺です。現在は秘仏の弘法大師作といわれるこの地蔵菩薩には、昔、賊が押し入った際多くの僧が出て来てこれを追い払い、翌朝ご本尊の足が汚れていたので、以来賊除け地蔵と号したという伝説があります。地蔵様が変身して賊を追い払ったということなんでしょうね。本堂の左方にある阿弥陀堂に安置されている阿弥陀如来像は、江戸六阿弥陀の四番目で、その石柱が門前に立っています。図会の挿絵では右下角の本堂の上に阿弥陀堂や九品仏のお堂と、左に鐘楼も見えます。阿弥陀堂の前に２基ある石の燈籠の左側は庚申塔で、竿石の正面と両側面に三猿が一疋ずつ彫られています。燈籠型の庚申塔は初めて見ました。

与楽寺を右に出て与楽寺坂を上り、田端駅方面への道と分かれて左に少し行くと芥川龍之介邸跡の説明板がありました。そこを左折し、右手に見える陸橋（童橋）を渡って坂道を下ります。この坂道の右側は田畑八幡宮（現田端八幡神社）で、下りきった先の信号がある交差点を右折すると、右手が入り口となります。

田畑八幡宮

参道入り口には名所図会の挿絵「田畑八幡宮」を入れた説明板があり、参道を真っすぐ行くと、途中一の鳥居の手前に何かオブジェのようなものがあります。これは、昭和初期の改修工事で暗渠になった谷田川に架かっていた石の橋で、その記念に現在の場所に置かれたものです。その先、参道は分岐して右手の石段を登ると富士塚があり、鳥居と小さな祠があります。田端富士三峯講が奉祀する富士浅間社と三峰社です。

左側の石段を上ると、文治５年（1189）頼朝の勧請によるとされる田端八幡神社の本殿です。説明板によると、大正14年（1925）に落成した総檜造りの社殿は戦災で焼失後、再建されましたが、平成２年、天皇即位の日に時限爆弾による放火で全焼し、同５年５月に復興されたとあります。比較的新しい建物に見えたのはそのせいでした。



▲長谷川雪旦　田畑八幡宮

二つの鳥居の間の参道脇には神輿庫が10庫以上もずらりと並んで壮観です。このすぐ隣は東覚寺で、不動堂の前にある一対の仁王像（赤紙仁王）は、明治元年（1868）の神仏分離令の発令によって現在地へ移されるまでは、この神社の参道入口に立っていました。挿絵では、参道入り口の門の手前、左右に仁王像が対で立っているのが分かります。江戸時代には門が閉ざされていて、参詣者が本殿まで進んで参拝することはできなかったらしく、仁王像のところから参拝するのが通例だったようです。この仁王像は病気身代わりと心身安穏を願って、自分の患部と同じ場所に赤紙を貼り付けるという赤紙仁王として有名ですが、これは明治の頃から始まった信仰です。

白鬚明神社から光明山圓勝寺（円勝寺）

東覚寺を右に出てカツラ並木の広い通りを直進、しばらく行くと八幡坂通という道と交差します。左折してこの通りを少し行くと、右手にまた神社が見えてきます。これは上田端八幡神社という神社で、図会には登場しませんが、由来は前述の田端八幡神社とほぼ同じで、祭神の頼朝由来も共通しています。普通なら素通りするのですが、次回に出てくる白鬚明神社がここに移築されているようなので、寄り道することにしました。

拝殿に向かって左側の石段を上ると、奥の本殿の並びにその白鬚明神社（現白鬚神社）がありました。石造りの鳥居と小さなお宮があり、祠の下に手書きで白鬚神社と書いた白い板が置いてあります。図会では平塚明神社の次の項目になっていて「往古は平塚の城中にありしとぞ」とあり、小さな石の祠が挿絵に載っていますが、挿絵とそっくりの祠を見て、これだ！とうれしくなりました。上田端八幡神社入り口の案内板には、白鬚神社の大祭の日にちも記載されていました。八幡神社を右に出て真っすぐに行くと、踏切に突き当たります。目の前を山手線の電車が通り過ぎるので珍しいと思ったら、この第２中里踏切は都内で唯一山手線が通る踏切だと、後で分かりました。

踏切の向こう側には鬱蒼とした森が見えます。これが円勝寺で、踏切を渡るとすぐ右手に参道と山門が見え、入り口左側には大勢至菩薩霊場の石碑や庚申塔があります。挿絵では本堂の右側の小高い丘に勢至堂がありますが、現在ここは墓地になっていて勢至堂はありません。墓地の入口には、大きな供養塔があり、一番高いところからは寺の屋根が下に見えるくらいの高度があります。境内は狭いのですが、本堂前の大きな２本のヒマラヤ杉と、小さな池のまわりに季節の花が植えられたこぢんまりとしたお庭が対照的です。円勝寺を出てそのまま線路に沿って５分も歩くと JR 駒込駅です。

【取材】歩いた人（文・写真とも）：
広報部会・中村貞子

（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

催事案内

新型コロナウイルス感染防止にご協力を

このお知らせを掲載するようになって、もう1年になります。ワクチン接種も進んできてはいるようですが、コロナ禍は依然として続いています。引き続き、催事参加時には、下記のご協力をよろしくお願いいたします。

1．①から④に該当する場合は来場・参加はご遠慮ください。①発熱があり検温の結果、37.5℃以上　②咳・咽頭痛などの症状がある　③新型コロナウイルス感染症陽性とされた者との濃厚接触がある　④過去2週間以内に入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国・地域への訪問履歴及び当該在住者との濃厚接触がある

2．来場時(見学会参加時も同様)は①から⑥を守ってください。①入館時、参加時に検温を受け、マスクを着用し、手指を消毒する　②受講票、参加票切り取り線下部のチェック表に記入提出する　③会場内及び見学時の会話は極力控える　④咳エチケットを守る　⑤入場前・トイレ待機・終了後退出などの際は社会的距離を保つ　⑥会場内や見学時に体調不良の場合、速やかにスタッフに伝える

◆催事参加者の氏名及び緊急連絡先を記載した名簿の作成・保存が要請されています。名簿は有事に保健所などに提供する場合があることをご承知おきください。

事業部会長　川上由美子

古文書講座

◆9月から第2期を開講

すでに申込は締切っておりますが、9月から下記日程で第2期を開講します。新型コロナ感染防止にご留意してご参加ください。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：9／15(水)、10／6(水)、11／10(水)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：9／22(水)、10／20(水)、11／17(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(徳川林政史研究所非常勤研究員)
- 開催日：9／18(土)、10／16(土)、11／20(土)

- 時間：各講座とも午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸東京博物館1階会議室
- 参加費：各講座とも全3回2,000円(初回一括払い)

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

友の会セミナー

第208回「長谷川雪旦～江戸の街の一級資料『江戸名所図会』を描いた絵師～」

講師　海老塚耕一さん(多摩美術大学教授)

◆代金1両5匁(現在の貨幣でおよそ10万円)もする『江戸名所図会』が何故ベストセラーになったのか？『江戸名所図会』の執筆・編纂にあたったのは誰か？『江戸名所図会』を描いた長谷川雪旦はどのような人か？唐津藩の絵師が何故『江戸名所図会』に関わったのか？『江戸名所図会』 650景余で主張したかったのは何か？西洋美術の透視図法と雪旦の俯瞰構図法の違いは何か？『江戸名所図会』の他にどのような肉筆画や版画があるか？『江戸名所図会』は後世に、どのような影響を与えたのか？現代美術家として『江戸名所図会』と長谷川雪旦に関わる数々の疑問を解き明かしていきます。

◆講師略歴：えびつか・こういち
1951年神奈川県横浜市生まれ。多摩美術大学大学院芸術研究科終了。現在、多摩美術大学芸術学部芸術科長。現代美術家・彫刻家・版画家。トリエンナーレ金賞・平櫛田中賞・神奈川県立近代美術館賞受賞。

- 開催日時：10月24日(日)　14時～15時30分
- 申込締切：10月4日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階大ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名・電話番号連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】中村明義(事業部会)

第209回「『名所江戸百景』考 ー百万都市に向けた眼差しー」

講師　大久保純一さん(国立歴史民俗博物館副館長)

◆安政中期に制作・刊行された『名所江戸百景』は、浮世絵風景画の第一人者である歌川広重の最晩年を飾る大シリーズである。彼のもう一つの代表作、天保前期の保永堂版『東海道五拾三次』とともに、現代のさまざまなメディアにも取り上げられよく知られている。近景の事物を極端に拡大し、その向こうに風景をのぞき見せるというインパクトのある構図などから、ゴッホなど西洋近代の画家たちに少なからぬ影響を与えているが、その特異な構図法の誕生には必然的な理由があった。今回はこのシリーズが広重の画業の中でどのような位置を占めるのかを、彼の風景画シリーズの構図法の変化や名所の取り上げ方などと絡めて考察するとともに、幕末から近代にかけての浮世絵風景画の歴史の中で果たした役割についても提示したい。

◆講師略歴：おおくぼ・じゅんいち
1959年徳島県生れ。東京大学文学部美術史卒、同大学院修士課程修了、東京国立博物館研究員。2000年国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授、「広重と浮世絵風景画」で東大文学博士。12～13年、20年国立歴史民俗博物館副館長併任。19年町田市立国際版画美術館館長併任。著書は『北斎の冨嶽三十六景　千変万化に描く』小学館、『広重と浮世絵風景画』東京大学出版会、『カラー版　浮世絵』岩波新書他。

- 開催日時：11月3日(水)　14時～15時30分
- 申込締切：10月18日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階大ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名・電話番号連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】待場　浩(事業部会)

見学会

定番・江戸城周辺探訪－その５（外濠）－

◆江戸城外濠は江戸幕府が天下普請による江戸城総構え工事として完成した、「の」の字形に江戸城外郭を囲む巨大な濠です。江戸城周辺探訪（外濠）としては、これまで「御茶ノ水～市ヶ谷御門跡」、「市ヶ谷御門跡～赤坂見附駅」までを探訪しましたが、今回は「赤坂見附駅」～「日比谷御門跡」まで歩き、その周辺に残る遺跡・遺構を探訪します。途中「山王日枝神社」「金刀比羅宮」を参拝します。東京メトロ日比谷駅で解散となります。

- 開催日：９月26日（日）小雨決行、受付後順次出発
- 受付開始：12時30分　受付終了：13時（時間厳守）
- 集合場所：東京メトロ「赤坂見附」駅Ａ出口赤坂見附交番前小広場（Ａ出口の昇りエスカレーターを降りて左手交番前小広場）
- 申込締切：９月13日（月）必着
- 定員：80人　同伴者可（保険の都合上、はがきに氏名、住所、電話番号連記）
- 参加費：会員、同伴者とも500円（当日払い釣銭なし）

【企画担当責任者】大塚　仁（事業部会）

再訪　広重『名所江戸百景』周辺探訪－その２（本所深川・大川端周辺）－

◆広重が描いたと思われる場所とその周辺の再探訪シリーズの２回目です。今回は両国橋下流の隅田川に沿って、両国～新大橋～清州橋～清澄白河まで歩きます。大川の流れの中に、対岸安宅辺りは雨に煙り、突如として激しく降り出した夕立に、足を速める橋の上の人々、あの印象派の画家ゴッホにも大きな影響を与えた絵「大はしあたけの夕立」や、深川萬年橋に吊るされた亀を描き、「鶴は千年、亀は萬年」としゃれた絵「深川萬年橋」などを訪ねます。所要時間は約３時間半、大江戸線・半蔵門線の清澄白河駅で解散となります。

【今回訪ねる広重の作品】「両ごく回向院元柳橋」「浅草川大川端宮戸川」「大はしあたけの夕立」「深川萬年橋」「みつまたわかれの淵」

- 開催日：10月31日（日）小雨決行、受付後順次出発
- 受付開始：12時30分　受付終了：13時（時間厳守）
- 集合場所：JR総武線「両国」駅西口改札出口
- 申込締切：10月21日（木）必着
- 定員：80人　同伴者可（保険の都合上、はがきに氏名、住所、電話番号連記）
- 参加費：会員、同伴者とも500円（当日払い釣銭なし）

【企画担当責任者】小島裕一（事業部会）

会員優待のお知らせ

会期残り僅か お見逃しなく！

●特別展「大江戸の華－武家の儀礼と商家の祭－」

会　期：７月10日（土）～９月20日（月・祝）
会　員：一般700円、65歳以上350円、大・専門生560円
　　高・中・小学生350円
同伴者：一般1,120円、65歳以上560円、
　　大・専門生890円、高・中・小学生560円
●（注）割引を受けられる同伴者は１人だけです。

次回予告

●特別展「縄文 2021 －東京に生きた縄文人－」

会　期：10月９日（土）～12月５日（日）

企画展のご案内

会期残り僅か お見逃しなく！

●「相撲の錦絵と江戸文化」

会　期：７月17日（土）～９月５日（日）
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

次回予告

●「ひきつがれる都市の記憶－江戸東京3万年史」

会　期：９月18日（土）～12月５日（日）
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

休館日

9 月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

10 月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

催事のお申込方法

◆普通はがき（63円）に、
①催事名（略名可）・開催日　②会員番号（必須）
③氏名（同伴者連記）　④連絡先電話番号
を明記して下記の「友の会事務局」へ。
＊同伴者がいる場合は、その氏名、電話番号を併記する。見学会の同伴者のみ保険の都合上、住所の明記も必要。
◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入してください。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
　江戸東京博物館「友の会事務局」

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**

＊お申込いただきますと、「受講票参加票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録、切り取り線下部のチェック表を提出してください。
なお「受講票参加票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後、一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。

＊「受講票参加票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日（11時～12時、13時～16時）**にお願いします。

＊「受講票参加票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報＜えど友＞第122号
令和３年９月１日発行（奇数月１日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail：edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：待場　浩（会長）　編集長：中村貞子
福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子、横島利明、福田　徹、元沢　宏、秋元康良
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話 03-3626-9910